2Ta－2

1920年の女性労働の実態～『国勢調査』を用いて～

経済政策研　　○高橋　桂子

（目的）　女性は経済発展のそれぞれの段階で労働とどのように関わってきたのか。先行研究では，①20世紀初頭，女性の多くは家内労働者として従事している，②年齢・配偶関係別では，若年未婚女性は紡績業や製糸業の女工として，既婚女性は農業などの家内労働者として就業していた，などが明らかになっている。ここでは，既存の統計資料を用いて，全国ベースと47都道府県ベースで，女性がどのような働き方をしていたか計量的に把握する。

（方法）　資料として第1回『国勢調査』（1920年）を用いる。分析に用いる主な項目は，年齢別・配偶関係別にみた職業小分類である。

（結果）　1920年の女性労働の特徴は以下の通りである。

＜全国ベース＞①15歳以上でみた労働力率は約50％で，現在とほぼ同水準である。②産業別では，農業部門で従事していた割合が64％ともっとも高い。ついで製造業の15.6％である。③中村（1985）にしたがい，近代産業・在来産業という新たな軸で再集計した結果，1920年において女性労働者の8割強は在来産業部門で従事していたことがわかった。

＜都道府県ベース＞①47県別では，労働力率の水準，年齢別にみた労働力率曲線の形状は大きく異なる。労働力率は，もっとも低い東京（25％）からもっとも高い茨城（76％）まで，その差は大きい。その形状は，概して，都市規模が大きくなるほど，台形型からM字型を呈する傾向にある。